

研究者ネットワークとアルムナイ活動

ードイツに着目してー

ボン研究連絡センター

田畑 千恵子

## 1.はじめに

本稿の目的は、ドイツにおける研究者ネットワーク、アルムナイ活動の一端を明らかにすることである。筆者は日本学術振興会の国際学术交流研修により、2017年4月に研究者国際交流センター（当時）に着任、「日本学術振興会の事業経験者である外国人研究者」を対象とした「研究者コミュニティ形成支援」、すなわち Alumni Association（日本学術振興会においては「同窓会」と訳している）の支援を主に担当した。それまで筆者は、同窓会と言えば各種の学校・大学の卒業生で組織するものとのイメージを抱いていたが、「事業経験者」の括りで「研究者」をネットワーク化することが可能である、との新たな気づきを得た。その後、2018年4月からのボン研究連絡センターへの派遣が決定した。研究者コミュニティ「ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（Deutsche Gesellschaft der JSPS-Stipendiaten e.V.、略称：JSPS-Club）」を1995年に最初に組織したドイツにおいて、研究者のネットワーク化を企図する活動、各種の学校・大学の卒業生にとらわれない「アルムナイ（Alumni）」を対象とする、様々な活動が行われていることを知った。我が国においても、「事業経験者」であるアルムナイの活用、研究者のネットワークの構築が、大学・学術研究機関の国際化を推進し、教育・研究の国際競争力の強化に資することが考えられる。このような背景から、特にドイツにおける研究者ネットワーク、アルムナイ活動の一端を明らかにし、ひいては我が国の活動への示唆を得ることを目的に、本調査を実施することとした。

## 2. 日本における研究者ネットワーク、アルムナイ活動の状況

第一に、我が国における研究者ネットワーク、アルムナイ活動に関する先行研究の状況とその限界について述べたい。「同窓会」「同窓生」「校友会」「校友」「卒業生」等のキーワードで確認できる先行研究は、そのタイトルから類推するに、ほとんどが大学同窓会に関するものである。まず、天野（2000）は、日本の大学における同窓会の歴史的経緯を分析している。高田（2012）は、中期計画の記述を対象として、国立大学における同窓会の位置づけに関して調査を行っている。また、大川（2016）は、全学同窓会の会則に着目し、その目的と機能、責務と自覚について調査を行っている。これらに加えて、江原（2009）は米国の大学における卒業生研究の歴史的変遷を、江原（2010）は米国の大学の同窓会の成立過程を明らかにしている。さらに鳥居（2013）は、同窓会活動における大学への戦略的な支援について、米国ミシガン大学を具体例に紹介している。国際的ネットワークに着目したものとしては、原（2015）の私立大学同窓会海外支部に着目した研究がある。

このような状況において、平成23年度文部科学省先導的・大学改革推進委託事業報告書「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究－主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み－」（2012）では、各国における外国人留学生奨学金制度とそのフォローアップ施策、元奨学生ネットワークに関する調査を行い、我が国における留学生政策

のあり方を論じている。当該調査の対象は研究者ではないが、留学生が将来の研究者候補であると考え、今後の研究者ネットワーク、アルムナイ活動を考える上で、重要な示唆を与えている。同報告書において、谷口・堀江は、以下6点を元日本留学生に対するフォローアップ方策として提案している。

- 1) 文化外交政策としての国際教育交流施策のとらえ直し
- 2) 日本留学支援機関の海外拠点の量・質両面における拡充
- 3) 留学前から留学後まで連動した支援制度
- 4) 既存の元日本留学生同窓会組織に対する重点支援と関係機関との連携
- 5) オンライン・コミュニティの階層的な設定による元留学生の取り込み
- 6) 修了生の研究活動支援のための再招聘や共同研究促進制度の充実

次に、先行研究の状況を踏まえ、我が国における研究者ネットワーク、アルムナイ活動の状況について述べる。日本学術振興会は平成15年(2003年)度より、元外国人特別研究員等の事業経験者による研究者コミュニティ(Alumni Association、同窓会)形成のための支援を開始した。2019年2月現在、世界各地で18の組織が設立されている。各組織は日本学術振興会からは独立した存在であり、その所在国において法人格を有する場合もある。また日本学術振興会が、一部その活動の経費を支援している。日本学術振興会が提供するプログラムとしては、「外国人研究者再招へい事業」(BRIDGE Fellowship Program)が挙げられる。これは、各研究者コミュニティに所属する事業経験者に対し、再度来日して日本人研究者との研究協力関係を形成・維持・強化する機会を提供することを目的としたプログラムであり、2009年から実施している。

また、帰国留学生の観点からは、日本学生支援機構がメールマガジン「Japan Alumni eNews」を発行している(2019年1月現在、通算117号)。さらに、留学を終え、自国において教育、学術研究または行政の分野において活躍する帰国留学生に対し、①日本で再度短期研究を行う機会を提供する「帰国外国人留学生短期研究制度」、②日本における留学時の指導教員を現地に派遣し、研究指導等を実施する「帰国外国人留学生研究指導事業」を実施している。その他近年の新しい取り組みとして、科学技術振興機構が実施する「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」(さくらサイエンスプラン)において、当該事業で日本に招へいされ交流計画を修了した者が、帰国後も我が国の科学技術や教育・研究機関に関する情報を継続的に共有することを目的として、「さくらサイエンスクラブ」の活動が行われている。

なお本稿では、「Alumni」は「アルムナイ」と表記した。事業経験者や大学・学術研究機関での滞在経験者は「卒業生」ではなく、また必ずしも全てが「同窓会組織に属する同窓生」や「校友会組織に属する校友」でもないことから、この表記を使用する。

### 3. ドイツにおける研究者ネットワーク、アルムナイ活動の事例調査

今回、日本学術振興会の対応機関の1つであるアレクサンダー・フォン・フンボルト財団、および筆者の所属機関である産業技術総合研究所の包括的な連携先であるフラウンホーファー研究機構における、研究者ネットワーク、アルムナイ活動について、ウェブサイト公開情報の調査、ならびに担当者への聞き取り調査を実施した。

なお、ドイツ学術交流会も日本学術振興会の対応機関であり、アルムナイを支援する包括的なプログラムを有しているが、これについては平成 23 年度文部科学省先導的の大学改革推進委託事業報告書「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究—主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み—」（2012）において詳細な検討がなされていることから、本調査の対象からは除外した。しかしながら本調査実施にあたり、ドイツ学術交流会担当者にも質問の機会をいただき、筆者の疑問点の整理に多大な示唆をいただいたことを申し添える。

#### 3-1. アレクサンダー・フォン・フンボルト財団

##### (Alexander von Humboldt-Stiftung)

###### (概観)

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団は、諸外国とドイツの研究者の国際的な学術協力を支援し、学術文化交流を発展促進させることを目的とした財団 (Stiftung) である。その前身は、1860 年に設立されたアレクサンダー・フォン・フンボルト自然研究財団 (Alexander von Humboldt-Stiftung für Naturforschung und Reisen) に遡る。1923 年のインフレにより財団資産が枯渇するまで、特にドイツ人研究者の在外研究支援を行っていた。その後 1925 年に、ドイツ国 (Deutsches Reich) により新たにアレクサンダー・フォン・フンボルト財団が設立された。その目的はドイツに滞在する外国人研究者、博士課程学生、学生を支援することであったが、1945 年に活動を停止した。そして 1953 年、ドイツ連邦共和国 (西ドイツ) 政府により、現在の財団がボン・バードゴースベルクを本部として設立された。

財団から研究奨学金 (Research Fellowship) や研究賞 (Research Award) を受けた、ドイツの研究者は諸外国で、諸外国の研究者はドイツで、受け入れ先機関・研究者の協力のもと研究滞在し、自ら選んだ研究プロジェクトを遂行する機会が与えられる。その支援は研究プロジェクトではなく、研究者個人に対して行われる。出身国や学術分野による割当枠の設定はなく、応募者の研究業績に基づいて、あらゆる分野の研究者から成る選考委員会によって選考される。

2017 年の地域別、学術分野別の研究奨学金ならびに研究賞の授与実績は以下のとおり。

#### 地域別

• 北米	147 (17.0%)	• サハラ以南アフリカ	26 (3.0%)
• 中南米	66 (7.7%)	• アジア	184 (21.4%)
• 欧州	365 (42.4%)	• 豪、ニュージーランド、大洋州	25 (2.9%)
• 中東、北アフリカ	48 (5.6%)		

#### 学術分野別

• 自然科学	336 (39.0%)	• ライフサイエンス	150 (17.4%)
• 人文学	263 (30.6%)	• 工学	112 (13.0%)

2017年の財団の総支出1億2700万ユーロのうち、96%をドイツ連邦政府ならびに欧州連合からの拠出金が占める。ドイツ連邦政府の拠出元は、連邦教育研究省、外務省、連邦経済協力開発省、連邦環境・自然保護・原子炉安全省である。その他、特定の研究奨学金ならびに研究賞に対し、マックス・プランク協会やフラウンホーファー研究機構といった非営利団体や、民間企業が資金提供を行っている。

ドイツに研究滞在する奨学生・受賞者には、その期間中、相応の研究費・滞在費が支援されるのみならず、ドイツ語研修や2週間にわたるドイツ国内のスタディーツアー、渡航間もない奨学生・受賞者が一同に会するネットワーク・ミーティングや、大統領主催レセプションに参加する機会が提供される。ドイツの研究環境だけでなく文化に触れ、また世界の研究者とネットワークを醸成する機会が設けられている。

#### (アルムナイ活動の位置づけ、戦略、目的)

財団では、その現在ならびに過去における奨学生および受賞者を「Humboldtianer」（複数形、単数：Humboldtian）と呼ぶ。2017年1月時点において、その数は28,553名に上る。彼らの当初の支援期間が終了した後も、研究交流を支援、助成する点に、財団の活動の特徴がある。アルムナイ活動は、2013年に設定された財団の戦略的焦点（Strategic Focus）に、明確に位置付けられている。「Einmal Humboldtianer, immer Humboldtianer (Once a Humboldtian - always a Humboldtian)」のモットーを掲げ、60年以上にわたるその歴史において、世界中で「フンボルト・ネットワーク」を形成、拡大を続けている。奨学生および受賞者は、研究奨学金および研究賞の授与にあたり、生涯にわたり「フンボルト・ネットワーク」の一員となるのである。「フンボルト・ネットワーク」は、狭義には過去から現在にわたる全てのHumboldtianによるネットワークを指す。だが広義には、ドイツにおけるHumboldtianの受入研究者、財団の選考委員会の委員、ピアレビューアー、その他財団主催シンポジウムの参加者を含む「Network Germany」を指すとしている。

2014年に実施された「フンボルト・ネットワーク」に関する評価調査、その結果をまとめた2015年の報告書を受け、「アルムナイとネットワーキングに関する戦略」が策定された。当該戦略は2021年まで有効であり、次の目的およびアクションを定めている。

## 目的

- 1) ドイツの学術ならびに研究環境の国際化を支援する
- 2) 学術協力を超えて、ドイツの対外文化教育政策に寄与する

## アクション

- 1) 早期に **Humboldtian** とフンボルト・ネットワークとの絆を醸成する
- 2) 研究（公）・個人（私）両面においてフンボルト・ネットワークを強化する
- 3) フンボルト・ネットワークの新たなメンバーを獲得する

## （予算・支援体制）

アルムナイ活動は財団の **Department 3, Sponsorship and Network** が担当している。当該部署は地域別に担当が分かれており、現役の奨学生、受賞者と支援期間終了後のアルムナイは、基本的には同一の担当者によって支援されている。その他、後述するプログラムにより、担当者が個別に指名されている場合がある。

またアルムナイ活動の資金は、支援を受けるアルムナイの属性により決定される。すなわち、当初支援を受けたプログラムの資金提供元が、基本的にはそのままアルムナイ活動の資金提供元となる。各年度の資金提供額の総額に対し、一定の割合をアルムナイ活動に充てることが定められているとのことである（割合は非公表）。例外的に、当初支援を受けたプログラムが存続していない等の場合、別の資金を充てることが検討される。

## （提供するプログラム）

### 1) 出身国への帰還・再統合のための奨学金（Return Fellowship）

独立国家共同体（CIS）を含む中・東欧諸国、発展途上国の研究機関へ帰還するアルムナイが自身の研究を発展させることを支援し、将来、ドイツとの学術協力や研究者の受け皿となることを企図するプログラム。支援額は 6500 ユーロ（月額 500 ユーロ x12 ヶ月、学術書籍購入支援 500 ユーロ）。

### 2) ドイツでのさらなる研究滞在のためのプログラム

以下 3 つのカテゴリーから構成される。

- ドイツにおける再度の研究滞在のための支援（Sponsorship for Renewed Stay in Germany）

当初支援を受けたプログラム終了から 3 年経過後から申請可能となる、ドイツで再度研究滞在进行を行うことを支援するプログラム。30 日以内、3 ヶ月以内の 2 つのカテゴリーがある。前者は日当、後者は月額の奨学金が支援される。なお後者については、ドイツ国内の受入研究者が必要である。

- ドイツで開催される学会参加のための支援

講演やポスター発表を行う場合、ドイツにおける学会参加のための手当が支援されるプログラム。

- 研究賞受賞者のドイツ再招へいプログラム (Inviting Research Award Winners for Renewed Research Stay in Germany)

当初支援を受けたプログラム終了の 3 年経過後から、ドイツにおける受入研究者が申請可能となる、研究賞受賞者がドイツで再度研究滞在を行うためのプログラム。3 ヶ月 (90 日) まで滞在可能で、支援内容は月額 3900 ユーロ、ならびにドイツ往復航空券代である。

### 3) ドイツからの研究者の受け入れ

以下の 2 つのカテゴリーから構成される。

- アルムナイ所属機関におけるドイツ人研究者の短期滞在 (Short Stays for German Specialist Colleagues at Humboldtian's Institutes Abroad)

ドイツ人研究者がアルムナイ所属機関で行う講義や、研究打合せのための渡航費の全額、あるいは一部を補助するプログラム。外貨準備が困難な国々への短期滞在が優先される。

- ドイツ人研究者への研究奨学金 (Research Fellowships for academics from Germany)

アルムナイが受入研究者となり、ドイツ人研究者が諸外国で研究滞在を行うプログラム。博士号取得 4 年以内の若手研究者を対象とする 6 ヶ月から 24 ヶ月のプログラムと、博士号取得 12 年以内の研究者を対象とする 6 ヶ月から 18 ヶ月のプログラムがある。後者の研究滞在は、3 年間にわたり 3 回に分割して行うことが可能である。研究奨学金の額は、滞在国内ならびに申請者の状況により異なる。当該プログラムに参加したドイツ人研究者も Humboldtian となり、生涯にわたりフンボルト・ネットワークの一員として、アルムナイに提供されるプログラムの申請資格を得る。また研究滞在終了後、ドイツへの帰還・再統合のための 12 ヶ月に渡る奨学金を申請可能である。

### 4) 物的支援

以下の 3 つのカテゴリーから構成される。

- 研究装置購入補助金

アルムナイが発展途上国で研究活動を続けるにあたり、必要な研究装置購入費用を補助するためのプログラム。上限 20,000 ユーロ、ただし複数人での申請や、複数の資金による購入の場合は上限を超過しても認められる場合がある。取得後直ちにアルムナイ所属機関の資産となり、最低 10 年間の使用が義務付けられる。

- 書籍の寄付

ドイツ人が著者、あるいはドイツの出版社による学術書籍を寄付するプログラム。上限 1,000 ユーロ。発展途上国のアルムナイからの申請が優先される。

- 出版補助金

ドイツでの研究滞在から続く研究成果の出版を支援するプログラム。ドイツ語の出版物、またはドイツの出版社からの出版であることが前提となる。なお、オープンアクセスな出版物に必要な経費も支援可能である。

5) ドイツ人研究者との長期的研究協力のためのプログラム (Research group linkage programme)

ドイツと諸外国の研究者の長期的研究協力を推進するため、最大 3 年間、上限 55,000 ユーロの支援を行うプログラム。相互の研究訪問、共同セミナーやワークショップ、研究機器、出版物等への支出が可能。申請者のうちの一人が外国人アルムナイ、かつ対象国（オーストラリア、日本、カナダ、ニュージーランド、西欧、米国を除く）の研究機関に所属している必要がある。協力体制には、財団の奨学生の候補者となり得る若手研究者を含むことが求められる。

6) ドイツ国外におけるイベント、ならびにネットワーキングのためのプログラム

以下の 2 つのカテゴリーから構成される。

- フンボルト・コレージュ (Humboldt Kollegs)

世界各地におけるアルムナイ間、ひいては現地の若手研究者とのネットワークを強化する目的で、会議開催を支援するプログラム。アルムナイ、あるいは世界各地のアルムナイ組織 (Alumni Association、後述) が申請することができる。テーマ設定が異なる学術分野のアルムナイが参加・発表可能なものであること、あるいは特定の学術分野であること、参加者のうち最低 3 分の 1 がアルムナイであること、が条件である。博士号取得 12 年以内の若手研究者やドイツの研究者、ドイツ学術交流会やゲーテ・インスティテュート、その他ドイツ学術関連機関の開催地における代表者およびアルムナイの参加が望ましい。支援額は上限 40,000 ユーロ、会議開催日数、参加者の属性および人数から計算される。宿泊料、飲食代、翻訳料、会場借料、印刷料等に充てることが可能である。そのほか、ドイツからの招へい者の旅費が支援されることもある。

- フンボルト・アルムナイ・アワード (Humboldt Alumni Award for Innovative Networking Initiatives)

既存のプログラムでカバーされないイニシアチブを支援するための賞。毎年最大 4 件が選ばれ、1 件あたりの賞金額は 25,000 ユーロ。4 件のうち 1 件は、女性研究者の活動を支援するイニシアチブとされている。なお 2019 年は、財団名の由来である研究者、アレクサンダー・フォン・フンボルト誕生から 250 年の記念の年であり、2 件追加され、計 6 件が支援を受ける予定である。申請はドイツ国外のアルムナイに限られる。受賞者の受賞式への渡航費用も財団が負担する。イニシチブの計画・実施にあたっては、アルムナイポータル・ドイチェラント (後述)、フンボルト・ライフ (後述) の積極的活用を呼びかけている。

(ツール)

1) フンボルト・ネットワーク・データベース (Humboldt Network database)

アルムナイならびにその受入研究者の情報を自由に検索可能なデータベース。アルムナイは制限情報へのアクセスが可能である。



## 2) アンバサダー・サイエンティスト (Ambassador Scientist)

諸外国において研究実施場所としてのドイツに関する情報を広め、財団とその他ドイツ学術関連機関に現地での広報やネットワーキングに関するアドバイスを行う目的で、42ヶ国 45名の研究者を「アンバサダー・サイエンティスト」に任命している(2019年2月現在)。財団は海外事務所を持たないため、後述のアルムナイ協会とともに、財団の海外広報において重要な役割を担っている。

## 3) アルムナイ協会 (Alumni Association)

財団とは別の組織として、111のアルムナイ協会が75ヶ国で設立されている(2019年2月現在)。所在地において国際的学術交流、学際交流、研究者の世代間交流を促進することを目的とし、財団と密接に関わりつつ、独自に活動を行っている。我が国においても、日本フンボルト協会が活発に活動を展開している。

## 4) フンボルト・ライフ (Humboldt Life)

アルムナイ同士をつなぎ、研究交流を深めることを目的に設けられた財団独自の招待制、クローズドのオンライン・プラットフォーム。

### (研究者アルムナイ)

ドイツ連邦教育研究省の資金提供による「International Research Marketing」プロジェクトにおいて、財団は長年のアルムナイ活動とネットワーキングの経験をもとに、ドイツの大学および学術研究機関における「研究者アルムナイ」(Research Alumni)に関する活動に焦点を当てた。同プロジェクトは、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団、ドイツ学術交流会、ドイツ研究振興協会、フラウンホーファー研究機構が共同で実施し、ドイツの国家戦略「Research in Germany」の一部である。

「研究者アルムナイ」は、博士課程学生、ポスドク、あるいは独立した研究者として、ドイツで一定期間研究活動に従事し、その後諸外国で研究キャリアを積む人々と定義されている。彼らはドイツでの研究滞在の可能性を若手研究者に伝えることができる理想的な立場にあり、さらに過去滞在したドイツの受入機関に対し、国際的なネットワークと協働関係の設立をもたらし、国際化の意思決定に際し助言することが可能な、重要な資源であるとされている。

ドイツの大学および学術研究機関において、研究者アルムナイに対するアプローチを活発なものにするために、2011年から2016年にかけて「Research Alumni Strategy Competition」が実施され、36の大学および学術研究機関が受賞した。その賞金は、国内外におけるイベントの開催から、アルムナイ・コーディネーターの雇用経費まで、幅広く使用可能であった。また2017年には、これら36機関のうちの10機関に、さらにアルムナイ活動を拡大し、国外で研究者アルムナイ会合を開催するための資金を提供した。2019年現在、財団からの資金提供は終了し、研究者アルムナイを対象とした活動は各大学および学術研究機関の手に委ねられている。

プロジェクト開始当初、ドイツにおいてアルムナイといえば大学の卒業生や同窓生が主なターゲットであり、研究者を対象とした活動はごく初期段階にあった。このため2014年から2018年にかけて財団は、各大学および学術研究機関における研究者アルムナイ活動の担当者の情報交換を目的とした、ワークショップを計4回開催した。また2015年および2018年に、2冊の報告

書を公表している。現在は、ドイツやドイツ語圏諸国の大学・学術研究機関のアルムナイ団体のネットワークである「[alumni-clubs.net e.V.](http://alumni-clubs.net)」の年次会合において、研究者アルムナイがプログラムの一部に取り上げられるなど、その活動は広がりを見せ始めている。

#### (アルムナイポータル・ドイチェラント (Alumniportal Deutschland))

アルムナイポータル・ドイチェラントは、ドイツ連邦経済協力開発省、および外務省が資金提供し、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団、ドイツ学術交流会、ドイツ国際協力公社、ゲーテ・インスティテュートの4団体の協力により、2008年から共同運営されている、「German Alumni」、企業、および大学のためのオンライン・プラットフォームである。ここで「German Alumni」は、「ドイツの機関において学んだ人、働いた人、研究を行った人、研修プログラムあるいはドイツ語学習コースを修了した人」と定義されており、非常に幅が広い。したがって、ゲーテ・インスティテュートでドイツ語コースを修了した筆者も当該ポータルサイトへの参加資格を有している。登録料や利用料は、個人のみならず企業および大学も一切不要である。

ポータルサイト設立の理由としては、ドイツに留学、あるいは種々の滞在経験があるアルムナイとのコンタクトを、国家としてのドイツが維持すること、アルムナイ間のネットワークや、アルムナイとアルムナイ組織とのネットワーク構築、ドイツ企業・団体がアルムナイに採用目的でアプローチするための場を提供すること、が挙げられている。

以下の4つのカテゴリーにおいて、プログラムが提供されている。

#### 1) デジタル・ラーニング

①修了証なしの自主学習、②修了証あり・チューター付、③①と②の組み合わせ、の3つのEラーニングのコース、ウェビナー、ドイツに関するクイズが提供されている。また継続的なドイツ語学習を可能とするため、ゲーテ・インスティテュートや報道機関ドイチェ・ヴェレのオンラインドイツ語学習教材が紹介されている。

#### 2) 仕事とキャリア

求人情報、アルムナイポータル・ドイチェラント登録企業の情報、キャリアアップに関する情報、専門的なウェビナー、フェローシップの公募情報等が提供されている。また、アルムナイポータル・ドイチェラントに登録したアルムナイは、ドイツ商工会議所会議と在外ドイツ商工会議所の協力のもと、世界各地やオンラインで開催されるキャリアフェア「Trained in GermanY」に無料で参加することができる。

#### 3) イベントと活動

世界各地で開催されるドイツ関連のイベント情報、アルムナイ組織の会合情報、キャリアフェアの情報を入手することができる。また随時、各種のプロジェクトやコンテスト、キャンペーンがポータル内で開催されている。

#### 4) コミュニティ

ソーシャルネットワーキングサービス、出身や専門により構成されるグループ、ブログを利用することができる。主要なアルムナイ組織一覧も紹介されている。また各種アルムナイ組織が、アルムナイポータル・ドイチェラント内で独自のウェブサイト構築することも可能である。

(今後の課題)

財団発足から 60 年以上が経過し、フンボルト・ネットワークが拡大を続ける中で、アルムナイの情報を収集し更新することの難しさ、またその情報の取り扱いが課題となっている。研究者の活動は国境を越え、時に移動を伴う。いま、どこで、誰が、何をしているのか、最新情報を絶えず入手し、どのように財団、ひいてはドイツとしてその情報を活用していくのかが、常に問われているとのことである。また、経済好調なドイツにおいても潤沢な予算が常に約束されているわけではなく、連邦政府からの予算確保は最重要課題である。フンボルト・ネットワークの重要性をアピールすること、そのためにはまず、ネットワークの活動が活発であることが非常に重要であるとのことであった。

## 3-2. フラウンホーファー研究機構 (Fraunhofer-Gesellschaft)

(概観)

フラウンホーファー研究機構は、実用化のための応用研究を担う研究機関である。1949 年にバイエルン州ミュンヘンで設立され、2019 年、創立 70 周年を迎えた。法的にはドイツの非営利団体 (eigeträger Verein、略称 e.V.) である。ドイツ国内に 72 の研究所および研究ユニットを有し、年間予算総額は 23 億ユーロ、25,000 人超の研究者およびエンジニアが働いている (2018 年 1 月現在)。研究予算 20 億ユーロのうち 70%は、企業からの委託および公的財源の研究プロジェクトによるもので、残り 30%はドイツ連邦および州政府から拠出される研究資金である。また、世界各地に研究拠点ならびに代表部を有している。

機構における研究分野は以下に分類される。

- 健康・環境
- 安全・セキュリティ
- モビリティ・交通
- 生産・サービス
- コミュニケーション・知識
- エネルギー・資源

また 72 の各研究所は、以下の 8 つのグループのいずれかに属している。

- 防衛・安全保障
- 情報通信技術
- イノベーションリサーチ
- ライフサイエンス
- 光・表面技術
- 材料・部材
- マイクロエレクトロニクス
- 生産技術

(アルムナイ活動)

機構総体としてのアルムナイ活動は、2016 年に新たに設立された「Fraunhofer-Alumni e.V.」により、組織的に開始された。同組織は、機構とは別の法的地位を持つ非営利団体である。なお、2016 年以前も各研究所において独自にアルムナイ活動は行われており、それらは現在も存在し、

活動を継続している。この点において、機構におけるアルムナイ活動が現在置かれた状況は、我が国における大学の全学同窓会と似通っていると言えよう。

アルムナイ活動に従事する職員は3名おり、その拠点はミュンヘンに所在する機構本部内に置かれている。Fraunhofer-Alumni e.V.と機構本部の関係は、密接かつ良好に保たれているとのことである。

(会員)

Fraunhofer-Alumni e.V.の正会員資格は以下のとおり。

- フラウンホーファー研究機構に雇用されていた者（有給/無給を問わない）
- フラウンホーファー研究機構に過去 **Guest Scientist** として滞在した者
- フラウンホーファー研究機構に過去 **Scholar** として在籍した者
- フラウンホーファー研究機構に過去、博士課程学生として在籍した者
- フラウンホーファー研究機構と協力に関する契約を交わした大学の雇用者のうち、その協力期間にフラウンホーファー研究機構と関係があった者

なお、機構で活動する学部生、修士課程学生、ディプロマ課程学生は、「タレント会員」(talent member) となることができる。タレント会員は総会における議決権がなく、後述するアルムナイポータルへのアクセスも限定的であるが、後日、機構との間で雇用関係が生じ次第、正会員への昇格が可能である。

正会員は年会費を納める必要がある（初年度無料、次年度以降 50 ユーロ、ただし 30 歳未満の場合は 30 ユーロ）。なお、タレント会員の会費は免除される。

2018 年 4 月時点の会員数は 620 名超とされている。会員の新規獲得にあたっては、現在、個人が機構を離れる際の面談において、会員となる意思確認を行っているが、この手法の有効性については、検討が必要とのことである。上に記した会員資格を満たす者は、ドイツ国内のみならず世界各地に相当数おり、今後はアルムナイ活動をさらに積極的にアピールし、いかに会員の獲得・拡大を図るかが課題である。会員登録に必要な時間や年会費が、物理的かつ心理的なハードルとなっている可能性もあり、正会員となる前段階の「ソフトステップ」も検討していくとのことであった。

また、いかなる法人も賛助会員 (support member) となることが可能である。賛助会員は総会での議決権を持たず、その会費は非公開である。賛助会員には現在、ドイツ鉄道、ボッシュといった大企業が名を連ねている。賛助会員の新規獲得も今後の大きな課題である。後述するキャリアポータルの利用といった利点を、前面に宣伝していくとのことであった。

さらに、機構の役員、各研究所の所長、本部のディレクターは職権会員 (ex officio Member) となる。年会費は免除される。

## (提供するプログラム)

### 1) アルムナイポータルにおける情報提供

アルムナイの活躍や活動を伝えるニュース、2)で述べるイベントの告知や開催報告等の情報を、記事形式で提供している。アルムナイポータルには会員のみアクセス可能であるため、ログイン前の状態では、各記事の冒頭4行程度が確認できるのみである。

### 2) イベント

年に1回、アルムナイ・サミットを開催している。テーマに沿った第一線の研究者による講演、若手研究者による講演、研究所見学等がプログラムとして組み込まれているとともに、**Fraunhofer-Alumni e.V.**の総会を同日に行っている。また、過去3回のサミットにはいずれも、機構理事長が出席している。第4回サミットは、2019年が機構の創立70周年の記念の年であることに鑑み、機構本部のイベントと同時開催を予定しているとのことである。

- 第1回、2016年9月16日、ベルリン  
テーマ：Data is the raw material of the future
- 第2回、2017年11月24日、シュツットガルト  
テーマ：Materials in the future
- 第3回、2018年9月27-28日、アーヘン  
テーマ：Additive Manufacturing
- 第4回、2019年11月20-22日、ベルリン（予定）

その他、機構主催イベントや出展展示会等への優先参加が随時アナウンスされている。

### 3) キャリアポータル

2018年5月にローンチされたキャリアポータルでは、機構を離れて一定期間が経過した会員、ならびに6カ月以内に契約終了が予定されている機構被雇用者の求職情報を、賛助会員である法人が閲覧することが可能である。これは、2016年の第1回アルムナイ・サミットに参加登録した505名（会員：265名、非会員：240名）のうち150名（回答率30%、会員：32%、非会員：27%）が回答したアンケート結果において、会員ならびに非会員ともに、アルムナイの活動として「キャリア開発」「採用活動」を期待する声が一定数あったことを受けて開始されたサービスである。

### 4) フラウンホーファー・ベンチャー（Fraunhofer Venture）との協力

機構本部の一組織であるフラウンホーファー・ベンチャーと協力し、機構における研究成果からのスタートアップを支援するべく、会員がメンターや創業者として関わるプログラムが、2018年から開始された。

## (今後の課題)

設立から間もない組織であり、(会員)の項目で述べたとおり、新規正会員、賛助会員の獲得が第一の課題であるとのことであった。サービスをより充実させ、「フラウンホーファー・コミュニティ」の一員であることのメリットを積極的にアピールし、**Fraunhofer-Alumni e.V.**の知名度を組織内外で上げていくことを目指している。そのためには、発信する情報のクオリティを上げる

こと、例えばアルムナイへのインタビュー記事の作成や、ソーシャルネットワークサービスを通じて、会員候補に直接コンタクトを取る方策が検討に値するとのことであった。

また現在、ニュースやイベント等の詳細情報は、アクセスが会員に限定されるアルムナイポータルに掲載されている。限定情報へのアクセスは正会員となるメリットであるが、翻って、登録の手間や年会費を納めるといったハードルを会員候補がクリアしなければ、情報にはたどり着けない。アクセス可能な情報に段階を設ける、情報を抜粋したニュースレターを E メールで配信する等、正会員となる前の会費が生じないソフトステップも検討の可能性があり、ミュンヘン周辺の大学等のアルムナイ組織の活動や、会員獲得手法の把握に努めているとのことであった。

## 4. 考察

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団、フラウンホーファー研究機構の事例調査を通じ、ドイツにおける研究者ネットワーク、アルムナイ活動が長きにわたり実施されてきたことが明らかになった。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団においては 60 年を超える活動の歴史があり、その経験がドイツ連邦教育研究省の資金提供による「International Research Marketing」プロジェクトに結実し、2011 年から 2016 年に渡って実施された「Research Alumni Strategy Competition」等により、ドイツ各地の大学・学術研究機関において、アルムナイを切り口とした研究者ネットワークを組織する活動の実施につながっていると考えられる。フラウンホーファー研究機構における活動は 2016 年に始まっていることから、少なからず当該影響を受けていると考えることも可能ではないだろうか。

ここで、本稿冒頭に紹介した日本学術振興会による研究者コミュニティ形成支援の取り組みと、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団、フラウンホーファー研究機構の研究者ネットワーク、アルムナイ活動を比較したい。その提供するプログラムの内容、総数の差は圧倒的であるが、最大の相違点は、日本学術振興会の支援、提供するプログラムの対象が、「研究者コミュニティそのもの」、あるいは「研究者コミュニティに所属するアルムナイ」であり、アルムナイ個人ではないことである。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団においては、アルムナイ協会を対象とするプログラム（具体的には、3-1（提供するプログラム）6）ドイツ国外におけるイベント、ならびにネットワーキングのためのプログラム）、あるいは現所属機関への援助を前提とするプログラム（具体的には、3-1（提供するプログラム）4）物的支援のうち、研究装置購入補助金）もあるが、基本的には Humboldtian、つまりアルムナイ個人をアルムナイ活動の中心に置いている。アルムナイが財団の提供するプログラムを利用したい場合、財団とは別の組織であるアルムナイ協会の一員である必要はないのである。なおフラウンホーファー研究機構においては、アルムナイ活動による提供プログラムの対象は Fraunhofer-Alumni e.V.の会員に限定されるが、アルムナイは全世界、どこにいても当該組織の会員になることが可能であり、やはりアルムナイ個人を対象としていると考えられる。

翻って日本学術振興会においては、事業経験者であること、アルムナイであることのみをもっ

て、「外国人研究者再招へい事業」を利用することはできない。必ず 18 のいずれかの研究者コミュニティに所属しなければならないのである。既に研究者コミュニティが設立されている地域のアルムナイで、当該事業を利用したい者に対しては、コミュニティの一員となることを促せばよいが、研究者コミュニティがない地域の場合、まずは組織の立ち上げを促す必要がある。組織の立ち上げ、その後の維持運営には多大な労力を要し、一人のアルムナイの力で実現することは不可能に近いと言えよう。限られた予算のもと、ある一定の規模の研究者コミュニティ、つまりは研究者ネットワークをアルムナイ活動の対象とする日本学術振興会の方針は決して責められるものではない。しかしながら、日本学術振興会の事業経験者である全てのアルムナイを対象とせず、組織の有無によりアルムナイ間で提供されるプログラムに格差が生じていることを、常に念頭に置く必要がある。今後は、二国間交流事業「オープンパートナーシップ共同研究・セミナー」のスキームのような、全てのアルムナイが利用可能なプログラムも検討されるべきであろう。

続いて、研究者ネットワークやアルムナイ活動が、ドイツの学術ならびに研究環境の国際化の支援のみならず、学術協力を越えたドイツの対外文化政策としての側面を持っていること、それを実施団体が意識していることが明らかとなった点を強調したい。ドイツにおける対外文化政策とは、ドイツ連邦政府が国外に向けて行う文化政策であり、自国の文化を国外に向けて紹介し、異文化と関わり合う政策である。文化外交、パブリック・ディプロマシーとも言う。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団においては、3-1（アルムナイ活動の位置づけ、戦略、目的）で述べたとおり、2021 年まで有効な「アルムナイとネットワーキングに関する戦略」の目的の第二に「対外文化教育政策に寄与すること」をはっきりと掲げている。また 3-1（研究者アルムナイ）で紹介した「International Research Marketing」プロジェクトにおいても、研究者アルムナイは「ドイツでの研究滞在の可能性を若手研究者に伝え」、「過去滞在したドイツの受入機関に対し、国際的なネットワークと協働関係の設立をもたらし、国際化の意思決定に際し助言する」存在、文化外交の担い手として捉えられている。なお 3-1（アルムナイポータル・ドイチェラント）の活動からも、資金提供をドイツ外務省が行っており、ドイツが国を挙げてアルムナイを対外文化政策の対象としていることは明らかであろう。

我が国では近年、地球環境問題をはじめとする国際社会の様々な課題を解決するため、科学技術を外交の資源として用いる「科学技術外交」の取り組みが注目を集めている。しかしながら、国際的な学術・研究協力や研究者間の国際的な交流を、科学技術外交を超えて文化外交として捉える視点は、まだまだ少ないのではないかと。少なくとも、筆者にとっては新たな視点であった。ドイツにおける研究者ネットワークとアルムナイを対象とする対外文化政策の成果は、大学・学術研究機関の国際化や教育研究力の強化を推進することにより、世界中の優秀な人材をドイツに集め「研究立地」としてのドイツの魅力を高めることであると考えられる。フラウンホーファー研究機構のアルムナイ活動も、ドイツ企業、スタートアップを巻き込んでいることから、結果的に当該成果に貢献しているとも言えよう。この点は、我が国が研究開発立国としての活動を推進するにあたっての重要な示唆を与えている。実際のところ、国際的な学術・研究協力や研究者間の国際的な交流は、現在既に我が国の文化を国外に向けて紹介するとともに、我が国の人々が異文化と関わり合う機会を与えている。ドイツの先行する取り組み、経験を踏まえ、我が国で行われている研究者ネットワークやアルムナイ活動を、今後外交面から再考することが望まれる。

最後に、持続的可能な研究者ネットワーク、アルムナイ活動の今後の展開を考える上での課題を述べたい。3-1、3-2の（今後の課題）で述べたとおり、新たなアルムナイの獲得、アルムナイの情報を常に最新なものに更新すること、その個人情報の取扱いが挙げられるが、これはドイツのみならず我が国、ひいては世界各国においても、避けて通ることはできない課題である。研究者は比較的容易に国境を移動し、その研究者人生において様々な国の様々な機関で研究を行う。今後は、アルムナイの獲得競争が各国において発生することも予想される。その競争を勝ち抜くためには、提供するプログラムをより魅力的なものにすること、ソーシャルネットワークサービス等のバーチャルなネットワークを利用し、タイムリーな情報提供を行うこと、参加のハードルを下げること、さらには研究（公）面のみならず個人（私）面でのつながりを重要視すること、が鍵となるだろう。

## 5. おわりに

本稿では、ドイツにおける研究者ネットワーク、アルムナイ活動について事例調査を行い、その現状および課題の一端を明らかにし、我が国の活動への示唆を得た。

なお本稿では、ドイツの大学における研究者ネットワークとアルムナイ活動を取り上げることができなかった。また予備調査において、マックス・プランク協会も組織横断的なアルムナイ活動を実施していることを確認しており、その状況把握も重要であると思われる。さらに、いわゆる「同窓会」「校友会」といった卒業生を含むネットワークやアルムナイと、各機関がどのように関係構築を行っているかの検討についても、今後の課題としたい。また、同様の検討が日本についても必要であろう。

本稿が研究者のネットワーク化、またアルムナイ活動のあり方を検討する参考となれば幸いである。



## 謝辞

本報告書の執筆にあたり、お忙しいにも関わらず快く質問にお答えくださった、ドイツ学術交流会、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団、フラウンホーファー研究機構の担当者の皆様に心より御礼申し上げたい。本稿中にお名前を明記することは、昨今の個人情報保護の観点から差し控えたものの、皆様と知り合い、率直に情報・意見交換させていただいたことこそ、筆者が国際学術交流研修に参加することにより得た何よりの成果であると考えている。

本研修中、ご指導くださった日本学術振興会東京本部の皆様、ボン研究連絡センターの皆様にも深く感謝申し上げたい。

そして本研修応募にあたり、快く送り出してくださった産業技術総合研究所計量標準総合センターの皆様、研修中随時サポートしてくださった担当者やその他関係の皆様、家族、友人、公私にわたり2年間の研修を支えてくださった全ての方々に、この場を借りて心から御礼を申し上げたい。ありがとうございました。今後は本研修で得た知識や経験を糧に、事務職員としてより一層、業務に取り組んでいきたい。

## 参考文献・ウェブサイト

- 天野郁夫（2000）「大学の同窓会－歴史と展望－」『IDE 現代の高等教育』419, 5-11
- 江原昭博（2009）「アメリカにおける大学の同窓会」『国立教育政策研究所紀要』138, 125-139
- 江原昭博（2010）「アメリカの大学における卒業生を対象とする研究－Alumni Studies の歴史的変遷－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第1分冊, 155-168
- 大川一毅（2016）「大学における全学同窓会組織の目的と機能－母校支援に関わる自覚的責務とその背景－」『アルテス リベラス（岩手大学人文社会学部紀要）』第99号, 145-164
- 川村陶子（2014）「ドイツ対外文化政策－ヨーロッパ統合進展の中で：新たな一歩か、原点回帰か」『EUアイデンティティの構築とその政治的意義』2013年度研究報告書, 3-9, 神戸大学大学院国際文化学研究所異文化研究交流センター
- 川村陶子（2015）「ドイツ対外文化政策の刷新と継続－歴史的考察－」『成蹊大学一般研究報告』第49巻第4分冊, 1-27
- 高田英一（2012）「国立大学の運営における同窓会の位置づけの現状について－中期計画の記述の分析を中心に－」『大学探求』4, 1-9, 琉球大学大学評価センター
- 谷口吉弘（2012）「各国政府外国人留学生奨学金等による修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究－主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み－」平成23年度文部科学省先導的・革新的大学改革推進委託事業
- 鳥居朋子（2013）「同窓会活動における大学への戦略的支援－ミンガン大学同窓会の事例に注目して－」『大学論集』44, 131-146, 広島大学高等教育研究開発センター
- 原裕美（2015）「私立大学同窓会海外支部の役割」『大学教育研究』第23号, 75-94, 神戸大学 大学教育推進機構
- Alexander von Humboldt Foundation, 2015, *The Discovery of Research Alumni: Forming lasting bonds between international researchers and Germany*; duz SPECIAL, RAABE Fachverlag für Wissenschaftsinformation [Klett Group]

Alexander von Humboldt Foundation, 2018, *The Future of Research Alumni: Putting the potential offered by international visiting researchers to strategic use*, duz SPECIAL, DUZ Verlags- und Medienhaus GmbH

Alumniportal Deutschland (最終閲覧日：2019年1月18日)

<https://www.alumniportal-deutschland.org/en/>

フラウンホーファー研究機構ウェブサイト (最終閲覧日：2019年1月29日)

<https://www.fraunhofer.de/>

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月3日)

<http://www.humboldt-foundation.de/web/home.html>

日本フンボルト協会ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月3日)

<https://avh.jp.com>

Alumni-clubs.net ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月3日)

<https://www.alumni-clubs.net>

マックス・プランク研究協会ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月4日)

<https://www.mpg.de/en>

日本学術振興会ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月5日)

<https://www.jsps.go.jp/>

日本学生支援機構ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月5日)

<https://www.jasso.go.jp/>

科学技術振興機構日本・アジア青少年サイエンス交流事業ウェブサイト (最終閲覧日：2019年2月5日)

<https://ssp.jst.go.jp/>